走り出す日本力

グローバルな視点で、地球をより美しく

青少年育成、環境保全、地域開発に貢献

団体・個人を表彰、支援

世界を見渡すと、貧困による少女の人身売買が日常化していたり、水道や井戸がないために子供たちが毎日、遠方までかみの重労働を強いられている国がある。世界から貧困をなくし、青少年の健全育成や地域開発などのため、そうした国に赴いて現地スタッフと協力して解決の道を探っている日本のNPO（民間非営利団体）は数多い。今回紹介する倫理研究所は、そうした団体や個人を毎年顕彰することで世界に貢献する「日本力」の一翼を担っている。

「人間生活のすじみち」を研究するために昭和20年9月に教育者の丸山敏雄氏が創立した新世文化研究所は現在、約18万人の個人と約6万2千社の企業がメンバーになっている一般社団法人倫理研究所に発展した。倫理研究所の事業は、多岐にわたるが、家庭、地域、企業活動を通じて日本を創造的に再生させることを目指している。

スローガンである「地球倫理の推進」は、グローバルな視野に立って、この地球をより美しく、快適に、調和のあるものにしていこうという活動。その一環として青少年の健全育成、伝統芸能の継承、医療などの人道支援、環境保全や途上国での地域開発などの活動を5年以上続けてきた個人・団体を表彰する「地球倫理推進賞」という顕彰制度を平成10年に設けた。27年で18回を数え、20年から国内活動と国際活動の2部門に分けて表彰している。これまで28団体が受賞した。

貧困で子供売られ 工場建て収入確保

昨年はカンボジアやインドで子供の人身売買の防止活動を展開する「かものはしプロジェクト」が受賞。子供たちが売られてしまう原因となっている貧困をなくすため、い草製品を作るファクトリーを立ち上げて収入の道を確保したり、売られてしまった子供たちの心のケアや社会復帰支援などを行っている。

当初はカンボジアで活動を開始したが、経済発展とともに人身売買が減少したため、インドにも活動の場を広げた。広報担当マネジャーの小畠瑞代さんは、「表彰後、倫理法人会の講演会に呼ばれることもあり、寄付などもいただいている」と話す。倫理法人会は、倫理研究所の法人会員組織。「地球倫理推進賞」をきっかけに、倫理研究所のネットワークが社会貢献活動を支えている。

かものはしプロジェクトは女性たちの自立を目指し、商品をつくるための職業訓練を行っている（photo by Natsuki Yasuda ／ studio AFTERMODE）

途上国でもできる 人力で深井戸掘り

24年にはフィリピンとインドネシアの水道のない地域で、上総掘りという技術で井戸を掘る活動を続ける「上総掘りをつたえる会」が受賞。「上総掘り」は、千葉県上総地方で考案された人力による深井戸を掘る技術。木材、竹、竹ひご、鉄管など発展途上国でも準備できる材料を使用する。昨年までで27基の井戸が掘られている。

代表理事の高橋文代さんは、「以前来日して技術を学んだカウンターパートがいるフィリピンのパタンガス州が活動の中心です。出た水は飲用に適しているか日本に持ち帰って検査したり、井戸のメンテナンスも行います。岩盤が固くて上総掘りで井戸が掘れない場所もありますが、そこには地球倫理推進賞の副賞で湧き水を引いた簡易水道のある小学校の校舎が台風で破壊されたため、現在、校舎建設を目的とする募金も始めているという。

フィリピンのパタンガス州バグバグ小学校で上総掘りで井戸を掘っている様子（上総掘りをつたえる会提供）

倫理研究所・丸山敏秋理事長に聞く

「創生」旗印に閉塞感打破

―倫理研究所が掲げる「純粋倫理」や「地球倫理の推進」とは

「社会生活のルールとしての倫理道徳は、法律のような外的規範とは異なる内的な規範の『良心』に基づいています。『良心』は教育によって涵養されるので、道徳教育の必要性があります。純粋倫理は、一般の倫理道徳と異なるものではありませんが、実践体験から導き出された生活法則で、より日々の暮らしに密着しています。提唱している『地球倫理の推進』は、地球環境の保護保全も含めて、『純粋倫理』をグローバルに推し進め、地球をよりよくしていこうという目標の表現です」

―戦後70周年に日本文化、日本人の精神性など見直す意味は

「古来日本は、大陸や朝鮮半島から異質の文化を輸入し、独自の文化、独特な文明を築いてきました。日本は縄文時代からの独自の精神文化が基盤にあります。その独特な日本文化、とくに見えないものに価値を求める精神性に世界文明（近代文明）の行き詰まりを打開していくためのヒントが多々あると思います」

―日本を創造的に生まれ変わらせる「日本創生」の考え方とは

「『日本創生』がなぜ必要かといえば、長い間、国内に閉塞感が充満し、国民は自信を喪失していたからです。経済低迷だけが原因ではありません。最大の要因は、未来への針路が明確に見いだせないことにあるでしょう。近代国家としての国力充実とか、さらなる経済発展を目指すといった、かつての針路に当たるものが今はありません。だから、『日本創生』を旗印に大きく掲げ、それぞれの立場でできることに取り組む必要があります」

―日本が世界に誇る技術、ノウハウ、文化を世界に広めることで閉塞感を打破するという「日本力」の考え方と合い通じますね

「通じます。肝心なのはやはり、技術やノウハウのもとになっている精神性でしょう。日本のサービス業に共通しているのは、徹底して相手に尽くす、喜ばせるという精神です。顧客の満足だけでなく、喜び（delight）を与えられるよう努める姿勢が、世界の人々を驚かせ、歓迎されています。翻訳が困難な日本語、たとえば『もったいない』『おかげさま』『おたがいさま』という言葉を理解する外国人が増えたら、世界は大きく変わると確信しています」

《企画・制作》産経新聞社生活情報センター

沙漠で植林活動

倫理研究所が中国内蒙古自治区恩格貝クブチ沙漠で植林を開始したのは、平成11年4月からで、昨年で15周年を迎えた。今年5月5日までの累計で参加人数は2094人、植林本数は32万5161本となった。今年から新たにウランブハ沙漠に植林を拡大している。

「参加者の最年少は親子で参加した6歳。最高齢は80歳。10回以上参加している人もいる」（内田文朗常任理事）という。植林活動を通じて自分を見つめ直したいという人が多いそうだ。現地の中国人大学生も参加するようになり、日中交流の場となっている。

生涯を沙漠の緑化に尽力した故遠山正瑛・日本沙漠緑化実践協会会長との出会いが倫理研究所の植林活動のきっかけ。第2回地球倫理推進賞を日本沙漠緑化実践協会が受賞し、まずは有志による植林を9年から開始。その後、「地球倫理の森」創生として活動している。

沙漠での植林活動

子供短歌コンクール

平成18年に倫理研究所の創立60周年記念事業として始まった小学生が対象の「しきなみ子供短歌コンクール」。文部科学省と全国民間ラジオ局37社が後援し、今年も9月30日締め切りで作品を募集している。

短歌作りを通じて国語力を培い、生きる力の核となる豊かな人間性を育成し、日本の伝統文化の継承に貢献していくというのが趣旨だ。ここ数年の参加小学校は約1300校、作品応募者数は6万1000人前後になっている。

もともと、倫理研究所の創立者・丸山敏雄氏が文化活動として、日本古来の短歌に着目し、会員を対象に「しきなみ短歌会」を主宰していた。「しきなみ子供短歌コンクール」は、一般の小学生に対象を広げた。各都道府県の教育委員会とも連携し、生涯局文化部の中村正生主事は「しきなみ短歌会の講師が小学校に出向いて短歌を教える出張授業も始めました」と話す。

「しきなみ子供短歌コンクール」表彰式